

---

# 緋弾のアリア ~暗黒の刃~

ラルド

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

緋弾のアリア ～暗黒の刃～

### 【Nコード】

N6857V

### 【作者名】

ラルド

### 【あらすじ】

東京武偵高校に通う萩原願は、自衛隊特殊部隊員として殉職した叔父の形見として闇色のサバイバルナイフを受け取った。そんな闇色のナイフを狙って、何故か次々と萩原に襲い掛かってくる謎の刺客。彼らに萩原は闘いながら叫ぶ。「いい加減にしろ（泣）！！」「切れ味抜群のナイフと持ち前の敵前逃亡精神、そして今は亡き叔父から学んだ自衛隊式戦闘法を使った萩原の戦いが始まるっ！！（作者の更新テンポはバラバラです。ご承知置きください。）

## プロローグ

薄暗いその部屋の中には、親以外で一番信賴していた大人の顔写真と桐の棺があった。棺のすぐそばには濃紺の制服と制帽がかけられ、その下には顔写真の主が生前持っていた装備が置いてある。

「陸上自衛隊第0特殊師団 第一特殊普通科連隊第三中隊長 萩原樹三等陸佐」

そう書かれた卒塔婆が壁に立てかけられている。自衛隊特殊部隊司令部の秘匿性から、特殊部隊に属する全ての隊員はたとえ殉職したとしても宗教的に葬られることはなく、戒名などは一切つけられない。卒塔婆には生前最後の階級が記され、山奥の自衛隊演習場にある墓場に遺体ごと葬られる。

頭ではわかっていても、そのときの俺には到底耐え切れなかった。部屋の入り口で突っ立って、遺影に映る叔父の顔を見るしか出来なかった。防人として、国を守る武人として最後まで闘った叔父は秘密作戦の最後にテロリストが放った一発の銃弾で命を落とした。もう、俺の頭をぐしゃぐしゃとなでて哄笑する叔父の顔を見ることは出来ない。なのに、涙は出てこない。

「願・・・」

いつからそこにいたのだろう。俺の横に幼馴染が立っていた。萩原家と親しい彼女の家系は、叔父の葬式にも参列が許されている。

「叔父さん、よく寝てるかな」

持ち前の冷静な声で、彼女は呟いた。彼女の瞳を見ると、やはり涙は浮かんでいない。

「ああ・・・たぶん。やっとよく寝られるって思ってるんじゃないか？」

そう返してやると、

「そうだね、あの叔父さんのことだし。たぶんあつちでも好き勝手してるよ」

彼女は微笑してそういった。

「なあ、お前高校どうするんだ？」

「私は武偵高に進むよ。願は？」

そう聞かれて俺は答えに詰まった。中卒で自衛隊に入ろうと思っていた俺にとつて、叔父の訃報は衝撃だった。殉職を覚悟していなかったわけじゃない。しかし近しい人が殉職するとその覚悟も消え去ってしまうような脆いものだった。

「俺は・・・少し考え直す。親戚一同から反対されるだろうし」

それに、萩原の家系は自衛隊反対派の主張がまだ根強く残っていた。この殉職を期に反対派の意見で萩原家がいつぱいになつてしまふ可能性が高い。特に数多くある分家のほとんどがそれで、本家の嫡男が自衛隊で殉職したとなると本家の血筋の維持を名目として俺にもっと手堅い進路を強制するに違いない。

「そのほうがいいと思う。親戚は大事にしないといけないものね」

そういうと、彼女は立ち去ってしまった。彼女の甘い残り香がかすかに彼女が存在したことを示していた。

## プロローグ（後書き）

初めまして。これが私、ラルドの処女作になります。文章グチャグチャ、表現分かり難しかもかもしれませんが、応援よろしくお願いします。

## 第一話 闇の継承

葬儀も無事に終わった次の日。くよくよしてても始まらないと今日から通常営業の俺こと萩原願が家に帰ると、そこには何故か和服を着て帯刀し、しかも正座している親父の姿があった。

「・・・それ、銃刀法違反・・・」

「じゃかあしい、屁理屈こねないでさつさと正装して座らんか」

親父、ついにトチ狂っちゃまったんだな。ご先祖様の霊が降りたのかもしれない。そう思いながら俺は階段を上り、ベッドに鞆を投げ出すと制服から和服に着替えた。いつものジャージのほう動きやすいのに。

「何なんだ親父。そんな格好して」

一応抵抗せずに親父の対面に座る。無論胡坐だ。

「いまからお前の継承式を行う」

「・・・いま、何て？」

「継承式だ。二度言わせるんじゃない」

継承式とは、代々の萩原家当主が持つ脇差（というより片刃のサバイバルナイフ。脇差みたいな上等なものじゃない）を継承する儀式のこと。萩原の武運を祈って作られた脇差を継承することで、代々軍事的な仕事に就いてきた萩原家当主と「ついでに」萩原家全体の安寧が約束される・・・らしい。

「誰から。というより、当主誰だったの」

そう問った俺の頭に衝撃が走った。見ると親父がチョップをかましてきていた。大気ないね。

「樹だ。忘れたのか」

「そうだったっけね。意識してなかったから忘れてたな」

まったく、と言いたげに親父はまたため息をつく。

「まあいいだろう。ではこれより継承式を始める。今回は緊急事態のため、当主代行と次期当主とだけで行うが異存はないな？」

「あえて言えば異存しかない」

「でははじめよう」

「おういマイ父?! わが子の意思は無視Deathか?!

「初代当主、萩原雄作とその刀の名の下に、我々萩原家は・・・」

キングクリムゾン!

「第八十七代萩原家当主、萩原願。初代当主の刀、取ると同時に萩原が負うべき責務を負うことになるがよいか」

「(どつちにしろ負うんだろうが。萩原なんだから)よかろう」

「(くっそ偉そうに)では刀を取れ。」

「そういわれて俺は、安置してあったサバイバルナイフ(ナイフだといえばナイフなんだ)を取った。その瞬間、何故か体に冷たいものが入り込んでくるような感じがした。ナイフの刀身が黒みを増しているような感じもする。」

「・・・終わりで。お疲れ様」

「なあ親父。このナイフは何で出来ているんだ?」

「脇差だが」

「ナイフだ」

「そのわきざさ「ナイフ」・・・わきざ「ナイフ」・・・w「ナイフ」・・・って、笑ってんじゃねえよ」・・・そのナイフは暗黒色金という物質で作られているそうだ。萩原の歴史書には詳しく書いてないんだが、自衛隊情報保全隊の資料だとダークマテリアルと呼ばれているそうだ」

「暗黒物質・・・か。厨二病患者しかいないのか官僚には」

「自衛隊内のコードネームだ。気にするな」

「それで、だ。と親父は一つ間をあげ・・・茶を飲んだ。」

「無意味にためるんじゃねえ!」

「そのナイフはお前に力を与えるだろう。しかし、その力を使いこなせたのは今だかつて初代しかいなかったそうだ」

「初代は化け物だからな」

初代当主萩原雄作は江戸時代初期に幕府の都合の悪い奴を次々と暗殺していたという。

「だから気をつける」

「はいはい」

生返事をする、俺は部屋にもどるために階段に足をつけた。

その三カ月後。俺の幼馴染こと伊椎翠は俺とともに東京武偵高校の合格発表サイトを見ていた。

「受かってるかしら」

「俺は確実だな。全員倒したもの」

「なら私もかな。あと一人だったのよね」

このとき、俺たちは知らなかった。教務課で既に俺たちが「ハンターズ」と呼ばれていたことを。

「えっと、134、138・・・あったあった。149番。順位は二位、Sランクか」

「お、俺一位だ。しかもSランク」

この瞬間、俺は武偵となって正義のために闘うこととなった。

## 第一話 闇の継承（後書き）

色金の継承、いかがでしたか？  
願は萩原家で期待されていた男なので、もしかするともしかするか  
もしれませんね。

さて次はいよいよキンジとの出会いです。  
キンジや武藤、不知火との高校生活で、願は何を学ぶのでしょうか。

感想をよろしく願います！

**第二話 H S S 野郎、乗り物オタク、優男。(前書き)**

タイトルどおり、原作と絡んできます。

## 第二話 HSS野郎、乗り物オタク、優男。

東京武偵高校の入学式。防弾制服・黒などという珍妙な名前の制服に身を包み、俺と翠は体育館で座して終わるのを待っていた。

「長い・・・武偵庁のおっさん話長いんだよチクシヨ」

一応武偵の最高機関である武偵庁の役人に向かってすら、敬意を發揮できない俺。

「・・・っ！！！」

そして隣には何故か頭を抱えている男子生徒。

「どした？気分でも悪いのか」

暇つぶしがてら話しかけてみた。別に他意はない。

「やっちまった・・・またHSSやっちまった・・・」

・・・新しいゲームかな？それともネットの短縮ワード？

「聞こえてるか？いま警察呼ぶからそれまでここで我慢できるか？」

「するかっ！」

回復成功。しかし、よく見ると顔立ちはいいんだな。

「名前は？」

「聞いてきたほうから名乗れよ」

意外とそこら辺は気にするタイプか？

「それもそうだな。萩原願だ。強襲科」

「遠山キンジだ。同じく強襲科だ」

「ランクは」

「・・・Sだ」

「同志。君の気持ちはよく分かる。Sはつらいよな。」

周りからの好奇の視線が限りなく痛い。

「・・・あああ」

そうずっと頭を抱えてうなっているキンジを放っておいて、俺は反対側の席に座っている男子に目をやった。黒い髪の毛をツンツンに立たせているソイツは、いかにも「もう耐えられませぬおやすみ

なさい」という目をしていた。

「眠いのか？」

そう訊いてみると、ソイツはハツとなってこちらに目をやってきた。目だけでこちらを見ている。

「そりゃあな。あんなに長い話をされると」

「全く持って同感だ」

そう答えると彼の目が和らいだ。

「俺は武藤剛気、車輛科だ」

「萩原願だ。強襲科。ちなみに俺の向こう側も強襲科だぞ？」

話してみると気さくな奴ばかりだな。武偵高校というともっと伶俐な特殊部隊的な人たちなのかとばかり。・・・叔父さんは例外だけどな。あの人の隊はお調子者しかいなかったし。

そんなこんなで周りに奴と自己紹介しあっていたら、いつの間にか入学式は終了していた。

次の日。学生寮がつい開放されるということで、俺とキンジ、そして違うクラスだが強襲科で一緒の不知火と一緒に寮の前で待っていた。ポストンバッグの中には生活用品以外には銃器と整備用具しか入っていない。

「はい、萩原と不知火、遠山に武藤。後は・・・えっと、何て読むのこれ」

「なんじゃそりゃ。」

「ああ、霧藤きりたけ遼しほ。ついてきなさい」

霧藤？確か諜報科でSランクだった奴か。確かにスパイ特有の冷たい感じはするな。

「ねえ萩原君」

「願でいいと言ってるだろ・・・」

そして名字で呼んでくる不知火。こいつは性質からそうなのかな？もてやすそうだし。・・・殺意湧いてきたわ。確かSランクってAランクが束になっても勝てないんだよね？

「萩原……え、もしかして願?！」

んあ?!いま俺はキレ気味なんだ。死にたくなかったら床に顔を擦り付けな。

「つて……遼?!お前、名字つ……!」

知り合いでした。すみません、カツとなってやりました、反省はしてません。

「ああ、いろいろ戸籍のトラブルがあつて変わっちゃったんだよ。顔面に怪我したから少し顔も変わっちゃったから気づかなかつたかな。言えばよかつたね」

そうか、今年の際知り合いしかいないのか。まあ、気が楽でないか。

「俺のことは無視ですかねえ?!」

まあ、武藤は無視する方向で。

ピピピピピピ。メールの着信音が鳴った。サブ画面には翠の名前。

「やつほぐ。そっちは寮?こっちも今寮だよ。柚梨佳ちゃんが一緒に驚いたっ。そっちは誰と同じ?」

……そちらもですかい。

「こっちは、聞いて(見て?)驚け。遼と相部屋だ。後は遠山って奴と不知火って奴だ。」

武藤は空気なのだ。そう自分を納得させながら返信するとすぐに久しぶりの着信音がした。柚梨佳のメールは特別の着信音にしてあるのですぐわかった。

「願くん、メールでも実世界でもお久しぶりですつ。高校入学を期に東京に引っ越してきました。静岡武偵中学校はすごくいいところだったから、東京のほうは少し不安……。でも、がんばるねっ」

……相変わらず、健気なんだかなんなんだか。

「おう。励めよ」

そう返信して、俺は荷物を解いた。

第二話 HSS野郎、乗り物オタク、優男。(後書き)

オリキャラが二人・・・捌ききって見せますとも。

あの三人タイトルのトリオって同じ部屋でしたっけ？まあいいや。

四人部屋なのに五人が住むという奇天烈さは流石武偵k「絶対違うだろっ！！by願」・・・武偵高ですね(流麗に無視)。

次回は武装の説明になる予定です。

## 武装設定

萩原願・・・豊和工業製89式5.56ミリ小銃折りたたみストツク式短銃身型・特殊部隊仕様

XD-9タクティカル(三点バースト・フルオート機  
構搭載ver)ニ丁

デザートイーグル50AE(同上)ニ丁  
MP5Kクルツ 二丁

暗黒色金製サバイバルナイフ”ノワール”

伊椎翠・・・HK91(Z24スコープ搭載)

スフィンクス・モデル3000タクティカルSWAT  
(三点バースト仕様)

桂柚梨佳・・・コルトSAAニ丁

遠山キンジ・ベレッタM92F 通称キンジモデル

サバイバルナイフ

武藤剛気・・・コルトパイソン

不知火亮・・・MK-23SOCCOM・LAM搭載

## 武装設定（後書き）

ようやく武器が決まりました。翠は結構マニアックな銃を持っていますね（笑）。

次回からミッションには行っていく予定です。

暗黒色金がどんな力を見せるのか。ご期待ください。

第三話 Mission・・・奴隸の一年の意地 前編(前書き)

初ミッションは前編後編の二つに分けます。

### 第三話 Mission・・・奴隷の一年の意地 前編

東京武偵高校には、自衛隊と同じようにピラミッド式の階級が出てくる。所謂「奴隷の一年、鬼の二年に閻魔の三年」である。そんなピラミッドの中で底辺もいいところの我々Sランクコンビは今、何故か教務課の呼び出しを喰らっていた。

「萩原と遠山あ。来たかあ？」

「見りゃあ分かるでしょう」

「おい願、相手は綴だぞっ?!」

先輩によると、綴は万年違法物のタバコを吸っているという。

「萩原あ。あんた確かまだ銃検書類出してないよねえ」

「・・・げ」

そういえばまだだった。自衛隊経由で結構危ない武器も銃検取れるコネはあるのに、何でここで忘れる。

「まあべつにどおでもいいんだけどさあ」

仮にも武偵高の教師だろう。公安委員会が決めた安全策をどうでもいって言うなよ。

「チャラにしてやるから、このミッション受けてくんないかなあ」

「報酬は」

「一年間テストなしにしてやるよ。単位も卒業分くらいはくれてやるうじやないか」

「・・・通称、女王様の綴。尋問のスペシャリストの声になっている。

「いいだろう。その任務受けた」

「んなっ?!」

キング。そこまでびっくりするなよ。これから勉強しなくてもいいんだぞ？

「え、じゃあ俺も受けます」

「そおかそおか。なら説明しよう」

そして俺たちはブリーフィングルームに向かって歩いていった。  
・・綴。そのタバコは絶対やめろ。

「今回の依頼主は国家公安委員会だ。来週の頭にアメリカの大統領が極秘で来日するから、その警護を依頼したいといってきた。なお今回は警護任務のためチームで動くことが厳命されている。チームは貴様らで編成しろ。以上、質問はあるか？」

「全くといっていいほどないです」

実に分かりやすいブリーフィングで助かった。

「来日前日になったら連絡を入れる。それまでは各自待機のこと。また、この任務に関しては関係者以外への口外を硬く禁止する。いいな」

いいもなにも。ばらしたら単位どころじゃないからな。

「では解散だ。かえってよし」

先生の言葉と同時に俺はブリーフィングルームから飛び出した。

「おい願、これからっ・・・え？」

キンジの声が聞こえた気がしたけどスルー。

装備科の建物は地上一階地下三階、白亜の建物である。その地下一階、恐ろしいほどに高く積み重ねた銃器に流石におのきつつB201作業室のドアをノックすると、

「待つててくださいいなのだあゝあああゝ?!！」

そんな子供っぽい叫び声と一緒に何か崩れたような音が内側からした。音の反響具合からすると、天井くらいから物が雪崩れ落ちたか。

「平賀さんだっけ？大丈夫か？」

一応自衛隊で救護の仕事もやったことがあったので部屋に入ってみる。すると目の前には。

「・・・」

なんとということでしょう。入学から三日目なのに既に格安の殿堂状態になっているではありませんか。

「いてて・・・失礼いたしましたのだ！」

「いやいや。いいんだ」

それにしても、これは人選を間違えたかな？こんなちっちゃい子が・・・

「それで、何の改造なのだ？」

・・・失言。この方に間違いない。

「ああ、改造じゃないんだ。仮チーム編成の必要があつてな、それで各専門教科から一人ずつ選抜することになった。装備科代表としてチームに参加してくれないか？」

「いいのですのだ。でも、その間は仕事が請けられないのですのだ」  
至極まっとうな意見である。

「その間の補償金は支払う。電卓はあるか？」

はいはいとすぐにもってきてくれた電卓は業務用だった（汗）。

「平賀さんの集客率と平均的な改造料金、それに迷惑料込みで・・・

計算が終わり、封筒をそのまま渡す。

「このくらいかな？」

平賀さん、今ここで開けない。礼儀が悪いぞ。

「?!?!」

ン十万円の札束を見て驚く平賀さん。

「じゃあそういうことで」

俺はまだ腰を抜かしている彼女にそういうと、装備科を出て行った。・・・銃がなくなって気づくのかな。と思いつつ。

第三話 Mission・・・奴隸の一年の意地 前編（後書き）

最初のミッションからド派手ですね（笑）。

次はいよいよミッション開始です。戦闘シーン入るかな、まだ未定です。

## 第四話 Mission・・・奴隷の一年の意地 後編

「揃ったな？」

強襲科からは俺とキンジ、不知火に翠。狙撃科からはレキ、装備科からは平賀さん。車輛科から武藤、衛生科からは野口楓さん。通信科代表は中空知さん。試験で先生をうならせた美声を期待しよう。超能力操作研究所からは星伽、情報科からは柚梨佳。まさに『奴隷の一年』のドリームチームである。ちなみにリーダーは俺ね。

「今回の任務は皆が聞き及んでいるとおりのものだ。各自役割を果たすように。以上、状況を開始する」

現在、午前七時。俺の状況開始宣言で、皆がそれぞれ動き始めた。

『イーグルネストより各局。アルファパパがブラボーチャーターより露出。ミッション開始です』  
合衆国大統領 エアフォースワン

「01より02へ。報道ヘリコプターに警戒しろ。現在羽田滑走路は飛行禁止区域に指定されている。不審な動きがあったら迎撃しろ。」

『02了解』

『05より01、02へ。アルファパパは現在パパチャーターにあり。』  
大統領専用車輛

「01了解。06へ。警護車輛を出勤させる。03、04、07は警護車輛に移れ」

『06了解』

羽田空港国賓専用ターミナルに直付けされた大統領専用車輛。その周囲には空港スタッフの格好をした自衛隊員や公安0課が配置されている。

『イーグルネストより01。パパチャーターが動きました。予定通り、アルファホテルに向かうようです』  
アメリカ大使館

「了解。引き続き沿道の監視カメラシステムの監視を頼む」

『了解です』

午前八時ジャスト。大統領専用車輦が軍用車のハマーに囲まれてゆっくりと羽田空港から出て行く。それと同時に武藤たちを乗せた防弾仕様のバンが警護車輦に合流した。・・・俺か？俺はステーキヨンワゴンで強襲指揮だ。

首都高速道路湾岸線から大井JCTを經由して一号羽田線に乗り、少し走ると前方に天王洲アイルが見えた。不動産が入っていることで有名な天王洲ビルのガラスが日光を反射して目を灼く。・・・日光の反射？現在は八時十五分。日光が反射してもそれが目に入ることとは・・・。その結論に行き着く前に、俺の目の前で信じられないことが起こった。

大統領警護車輦のうち一台ががくんと鼻先を右に揺らしながらスリップし、爆発したのだ。

『05より各局。バレットライフルによる狙撃を確認しました。狙撃地点は天王洲ビル28階、高度118メートルです』

「高さがアドバンテージだな。陸自の攻撃ヘリコプターは出ているか？」

『・・・いいえ、出ていません』

「やむを得ん、狙撃開始。各局に01より達する。緊急事態発生につき直接事態を説明する。先ほどの襲撃はバレットライフルによるものと確認された。狙撃ポイントは天王洲ビルの最上階だ。おそらく後ひとつは狙撃ポイントがあると見たほうがよい。大統領の身柄を安全確実に米国大使館へお届けしろ。いいな！」

『02了解』

ドラグノフ狙撃銃の銃声は聞こえない。その代わり遠くでヘリコプターのローター音が響いている。レキは改造された米軍制式の輸送ヘリ、UH-60に乗って空から銃を構えているのだ。

『こちらは陸上自衛隊第一普通科連隊である……』

「第0特殊師団第一特殊普通科連隊第一中隊だろっ？自衛隊関係で俺に隠し事は通用しない」

『……狙撃ポイントは？』

「天王洲ビルの最上階だ。民間施設だからミサイルを撃ち込むことは出来ない」

『……武器は』

「バレットライフルだ」

流石に絶句したのか、自衛隊の通信士からの返答がない。

『02より！現在機動隊が芝浦JCTを封鎖中だ！どうする？！』

「直ちに解除させる！俺につなげ！」

無線が手渡されるノイズ。

『第六機動隊中隊長、佐々木だ』

俺は息を吸い込み、秘伝の技を使うことにした。

「陸上自衛隊の萩原三等陸佐だ。封鎖線を解除せよ」

『っ？！……了解しました、直ちに解除します！』

そう、これは声帯模写である。今は亡き叔父の得意技だった。そして今俺は叔父の声を真似た。

『05より。射手死亡。ですが大統領専用車輛の前方に装甲車が二台います』

「機動隊か？車輛科か？」

援軍を一瞬期待したが、返ってきた答えは期待を予想以上に裏切るものだった。

『いえ、敵です。しかもタイヤのゆがみ具合から積載容量ギリギリの爆薬を搭載しているものと思われます』

「……この高架が吹き飛んじまうな」

『どうしますか』

流石に、そんな容量の爆薬を解除する訓練はしていない。

「……海に落とすことは出来るか？」

『はい。ただし、車輛を全て突貫させてからになります』

論外である。

『03より。タイヤを狙い撃って軌道を変えることは出来ないかな』  
「コンバットタイヤだからな・・・いや、装甲貫通弾ならできるか」  
『05より。実行しますか』  
「やってみろ」

爆薬を相当量抱いた軍事車輛が使われるなど、誰が予想しただろうか。しかし予測不能な自体にこそその真価が問われる武偵。とにかく。

・・・たのむぞ、レキー！！

第四話 Mission・・・奴隷の一年の意地 後編（後書き）

無線コードです。

イーグルネスト：本部（中空知、野口、柚梨佳）

01：萩原

02：キンジ

03：不知火

04：翠

05：レキ

06：武藤

07：白雪

といった具合です。分かりにくくてすみません。

アルファ・パパとかそういうのは大体お分かりでしょう。分からないかったら感想で聞いてください。出来る限り答えます。

大統領護送任務がスタートしました！

萩原たちの前にはある巨大な組織が立ちはだかります。

とりあえず、がんばれチーム「奴隷」！（奴隷イ？！by萩原）

第五話 T W I N S (前書き)

わかってもらえるかな・・・タイトルの意味。

## 第五話 T w i n s

レキがヘリコプターから放った八発の銃弾はおそらくタイヤに当たったのだろう。ゴン、という音が進行方向から聞こえてきて、水柱が高く二つ立ち上がった。

「よくやった」

『・・・05より各局。前方からハンヴィーが接近中です。注意してください』

「01よりイーグルネスト。増援部隊は」

『イーグルネストより。今編成中とのことです』

「・・・了解。何かあったらまた報告を頼む」

そして俺は無線機を全局一斉通信に切り替える。

「01より各局。05からの報告にあつたとおり、敵部隊が接近している。各員武装の上展開準備。大統領警護部隊にも包み隠さず全て説明しろ。いいな」

『02了解』

そして俺は横様に停車したステーションワゴンから転がり出るや豊和工業製89式小銃/SS/SB/TFTを構えた。大統領警護部隊の車輛も次々と停車して中から自衛隊員や公安0課を吐き出してくる。その中には無論翠やキンジ、不知火の姿もあった。

『05より。ハンヴィーの停止を確認。人員は十人ほど。装備はAN-94です』

「AN94っ?!」

ロシアのイジエマツシ社が開発したそれは1994年にロシア軍の制式ライフルに選定され、一時はAKの後継とも目されていた。しかし開発者の死亡により開発が中止されたことと構造が複雑なことから約6000丁が特殊部隊に納入されただけだという。そんな銃がこの襲撃に使用されたとする・・・。

「各局へ。最初の攻撃に気をつける。AN94はフルオート射撃で

の最初の二発をほぼ同時に撃ってくる」

『っ?!』

無線を通じて誰かの息を呑む様子が伝わってくる。そんな中俺はキンジに携帯で電話をかけた。

『・・・もしもし』

残念だなキンジ。HSSのトリガーは「わかっている」!

「いまからお前に写真を送る。それを狙え」

うん、それっていうのをHSSと捉えれば嘘ではない。俺は18禁の画像を送りつけた。

『・・・っ?!』

作戦成功よーそろ。

『・・・白雪。今すぐM60を出すんだ。急いで。出来るね』

『は・・・はいつ!キンちゃん様!!』

何だキンちゃん様って。接尾辞二つついてるし。周りを見てみよ  
うお二人さん。自衛隊員以下そこに展開している全員がこんな状況  
なのに巧妙に引いているよ。

『ガシャンガシャンガシャン!!』

バネ仕掛けの音がして、星伽さんのほつを見ると!そこには組み  
あがったM60があるではありませんか。

『じゃあ、それを貸して。』

まさか貴様。それを直接ぶっ放したら如何に防弾アーマーつけて  
ても死ねるぞ。

『願。9ミリパラベラム弾の後ろに50AEを当てられるかい?』

不可能は

俺の辞書に載っていない

『Nothing is impossible!』

『じゃあ、撃ってきたあとに3カウントだ』

『何するつもりだ?』

『ハンヴィーの燃料タンクを破壊する』

なるほど。確かに足を失ってしまえば彼らも浮き足立つはずだ。

「わかった。カウント取れ」

そういった瞬間、俺の腰の辺りから何か流れ込んでくる感覚が

した。頭が急に冴えはじめる。

『3』

ふと、照門<sup>サイト</sup>の先に景色が見えた。ハンヴィーの周りの景色だ。敵兵士が腰だめでAN94を構えている。

『2』

自衛隊の射撃で敵兵が撃ち倒されていく。ハンヴィーへの安全射線が生まれた。

『1』

キンジのいるはずのところから明確な殺気がハンヴィーに向いた。殺気が直線になってハンヴィーに伸びている。そして……。

『0!GO!』

その瞬間、俺の右手が跳ねた。XD-9タクティカルが9ミリパラベラム弾を発射したからだ。その一瞬後。左腕がジャンプするともにあつきよりも強い反動が伝わってきた。50AEがデザートイーグルの銃口から飛び出したのが「目で視える」。50AEが9ミリパラベラム弾の後部に衝突し、その運動エネルギーのほぼ全てを9ミリパラベラム弾に伝える。9ミリパラベラム弾は初速は秒速350メートル、50AEは秒速427メートル。ぶつかった衝撃で逃げるエネルギーを考慮しても、およそ秒速700メートルほどになる。そして、自衛官が撃った5.56ミリNATO弾が9ミリパラベラム弾を後ろから加速させるようにして前方に押しやる。速度はあつという間に約1600メートルに達し、タンクを撃ち抜いた。そして次の瞬間、M60の銃弾が当たって出来た火花が漏れた燃料に引火して、ハンヴィーが紅蓮の炎を挙げた。

まるでそれは、任務の最後を締めくくる大きな花火のようだった。

「人を放っておいて詩的な独り言ほざいてんじゃねえ!!!」

「ぐああつ」

せつかくいい気持ちで終わろうと思ったのに、武藤。君はやはり

空気の読めない男なのかね？

「全く。俺の出番がないじゃないか」

「？何のことだ」

「・・・メタだ」  
「うちの事」

なぜ天の意思作者の考えがわかる？

その後。米国大使館に大統領を送り届けた後、俺たちは即座に武偵高に帰った。教務課に報告、さて寝るか、と思いきと量に帰ろうとした矢先。目の前に数人の黒服が現れた。

「我々は武装検事だ。萩原願武偵と、伊椎翠武偵だな？」

「だったらなんなんだよもう。眠いから寝させてほしいな」

仮にも相手は殺しのライセンスを持っている者共。下手したら銃殺だぞ？大丈夫か俺。

「話がある。法務省まで来てもらおう」

・・・安眠を得られるのはまだ先のようだ。

## 第五話 T W I N S (後書き)

かっつっなり適当にミッションを終わらせました。それにしても願は凄いな。

腰から何かが流れ込んで云々というのはお分かりでしょうか。あれは・・・次回触れるかな？次回触れるはずの次のミッションのときに明らかになる予定です。

あくまでも予定なので。そうならなくても怒らないでください。

では。

## 第六話 法務省

黒塗りのセダンカーに乗せられて、いま俺と翠は霞ヶ関に向かっている。二台の車に分乗し、俺たちはそれぞれ後部座席の真ん中、両側から拳銃を突きつけられながら座っていた。

「法務省の武装検事が一介の武偵である俺たちに何の用があるって言うんだ？」

「着いたら説明するって言ってるだろうに。」

「そこをなんとかっ」

「俺たちは知らないんだよね」

・・・のらりくらりとかわされている。

そんなこんなで、俺たちを乗せた二台は中央合同庁舎第6号館A棟の法務省に到着した。

「依頼を受ける気、ない？」

武装検事を統括する武装検事長の部屋に入ったときに最初に耳に入った言葉がそれだ。・・・視界には優しそうな白髪のおじいさんが拳銃を俺の頭に向けている光景があっただけれど。

「銃を向けて言わないでください」

一応口で抵抗してみる。するとおじいさんは、

「ああ、すまんすまん。どうも最近依頼を断られて銃を使う機会が増えたものでね・・・」

・・・心胆寒から締められた思いです。

「その内容と報酬は？」

「内容は受けてくれるなら話そう。報酬は一億円を用意してあるよ」「よし翠！受けようこの依頼！！」

すぐさま俺は翠に提案した。金のためなら地獄まで。

「いいけど・・・」

少し呆れている翠。何に呆れているのだろう。

「では、依頼について話そうかの」

今回の依頼、それは。

「法務省に都合の悪い奴を見つからないように殺せだぜ！！！」

「武偵法九条、九条！！」

「臨時に武装検事の職にしておる。殺しのライセンスももう出来上がる頃じゃろうな」

手回し早いなっ？！盛り上がっていた俺もおじいさんに突っ込みを入れていた翠もびっくり。

「そいつの名前は小嶋幸太郎じゃ。職業は外交官。しかしCIAのスパイである可能性が出てきた」

「この前大統領を護衛したばかりなのに」

「それとこれとは別じゃ」

割り切りも早い。

「ま、政府がいいならいいです。」

「あんたも大概割り切りいいけどね」

何のことでしょう。

法務省からやっと帰ってきた。いま俺たちはマクドナルド学園島店で話をしている。

「とはいっても、人を殺すのはためらいがあるなあ」

「そうだよねえ」

一応強襲科で人の急所については学んだが、それを使いたくはない。

「仕方ない。お前は付いてくるだけでいい。俺がやる」

「ダメでしょそれ・・・なんか、依頼の内容的に」

確かに。

「ならどうする」

「・・・キャンセル」

「はいダメ。あのおじいさんの目はマジだった」

「・・・あなたが私の撃った銃弾をはじく！」

「俺が殺したことになりませんか？！」

出来なくはないけど。

「いい策はある。Not 人間にhingis 不可能はimpossible！」

「そうだね・・・じゃあ、考えてくるといっついで」

「おう。じゃあな」

そして俺たちは解散したのだった。

## 第六話 法務省（後書き）

法務省も結構ダークな一面がありましたね（笑）。

次回については「正しい」戦闘シーンが・・・あるかもっ！

まあ、描写についてはそんなに期待しないでください。初心者なもので。すみませんっ。

では、また次の話で。

第七話 intruders (前書き)

Caution!! ガンダムネタが入ってます。

## 第七話 intruders

寮の玄関に着くと、そこでは騒ぎが起きていた。強襲科の同級生死ね死ね団が5人くらいで取っ組み合いをしている。

ガッシ！ボカ！死ね死ね！教育上悪いことこの上ない。

少なくとも天下の往来の上でやっていていいことではあるまい。

俺が止めに入ろうとしたその瞬間、その取っ組み合いをしている中からひどい殺気が突き刺さってきた。俺が身をかわずと、つい一瞬前まで俺の頭があったところを357マグナム弾が通過していった。「ら、ライフリングの跡まで見えた・・・」

よくみると近接拳銃戦アルカタをやっているようだ。チラツと見えたただけだがおそらく、M29とグロック17L、CZ75、ブローニングハイパワーとSIG P226が使われている。防弾制服には無数の銃弾の痕。

「蘭豹が来ても面倒だし、片付けるか」

XD-9タクティカルは9ミリパラベラム弾を使う。UZIにも使われている銃弾だ。フルオートをぶち当てるわけにはいかないの  
で、三点バーストにしておこう。セレクターを三点バーストに切り替えて横様に2回引き金を引く。防弾制服で最も防弾性が高い胸元に一発ずつ銃弾を当てられた強襲科死ね死ね団はもがき苦しんで気絶した。

さて俺はいま寮の部屋に戻って、部屋の四人でスナック菓子をつまんでいる。ふとしたことから遼と武藤が18禁の雑誌を取り合っ  
て喧嘩しているのを笑ってみていると、ふと違和感を感じた。この部屋のすぐ前、通りをはさんだ向かい側のビルの屋上の街灯。その光が不自然にさえぎられていたのだ。俺は二人に拳をくれてやりつつカーテン越しにそれを詳細に観察する。その独特のシルエツト、それに俺が気づいたとき、屋上から非常に強い殺気を感じた。武偵

でもなく、今日襲ってきたテロリストでもなく、武装検事でもない。実戦で鍛えられた武偵にしか分からない、隠微かつ精密な殺気。そして、あのヘリコプター・・・UH-60ST。ウサマ・ビンラディン殺害作戦でSEALSが使用した最新鋭のステルスヘリコプター・・・それを使える国家機関は・・・。まあとりあえず。

「キンジ！亮！遼！D-1だ！」

武偵施設への不法侵入

「D-1?!」

亮がMk・23SOCOMを窓に向けて構えている。俺は遼が投げしてきたXD-9二丁を両手に構えた。もちろん、フルオート。キンジがおっかなびつくり窓に銃を向けている。俺はキンジに足元の雑誌を投げつけた。

「?!」

はい、変身完了。インスタント・ヒステリアモード。

「もう、これつきりにしてくれ」

聞こえない聞こえない。殺気が近づいてくる。そして。

全てあつという間だ。侵入者の足が見えた瞬間、俺はXD-9の引き金を引き絞っていた。素早い降下が災いして、侵入者は全身に銃弾を浴びることになってしまったのだ。しかしそれでも残りの侵入者はベランダに降り立って、こちらにM4カービンを向けてきた。5・56ミリNATO弾の運動エネルギーを逸らすには、跳弾射撃で下側から進行方向に対して入射角60度で当てればよい。侵入者は合計で四人。

「キンジ！二人頼む！」

俺は初手から伝家の宝刀である色金・サバイバルナイフを引き抜いた。重厚なそのナイフが銃火をマズルフラッシュ反射して輝いている。侵入者が目に見えて慄いた。

「戦場で身を引いたら負けだ」

既に丸ごと砕け散っている防弾ガラスを踏み砕いて走り出す。

「覚えておけ！諸君！」

走りつつも体を限界まで右にひねり、力を抜けば回転できるようにする。

「今日の私は・・・」

ナイフがその黒い輝きを増した瞬間。

「阿修羅すら凌駕する存在だ！」

「え・・・？」

侵入者の一人が目を丸くしている。なぜなら、何も防弾装備もしていない戦闘訓練など何もつんでいないに等しい若者が、体をひねりながら突っ込んできて阿修羅がどうか抜かしているのだから。しかし、それは大いなる間違いだ。俺は侵入者の手前で背筋などの力を抜いた。体は一気に元の形に戻ろうとして、その余力をスターターにさらにもう一回転。その状態で飛び掛る。侵入者二人の間をすり抜けた俺。そして後ろから聞こえてきたのは、肉から水が飛び出るようないやな音と、侵入者の悲鳴だった。そのまま後ろを振り返り、XD-9で横なぎに連射。侵入者四人はあっという間に倒れてしまった。

その後、ステルス・ホークや侵入者は教務課に捕縛された。階級マスターズ章も何も付いていない特殊戦闘服に皆首をひねっていたが、俺にはわかる。こいつらはアメリカ合衆国海兵隊武装偵察部隊マリンレンコンズだろう。そして狙いは俺。萩原のナイフと、CIAのスパイを狙っている邪魔者の排除という一石二鳥を狙ったんだろう。

さて、その次の日。学校に休みを頂いて俺たちは霞ヶ関に来てい

る。

「もう四月だって言うのに寒いねえ」

そういう翠はコートの中にHK91・・・G3ライフルとも呼ばれる・・・を隠し持っている。ま、俺も人のこと言えないんだけど

なっ！！

「なにあさつての方向にピースしてるのよ」

変態を見る目で見るなよ。悲しくなるだろ。前身ごろに隠してあるのは自衛隊制式の89式小銃。空挺団仕様をさらに装備科で短銃身にしてもらい、バレル下にはショットガンが取り付けられている。背中にはMP5Kを二丁隠<sup>カールツ</sup>していて、XD-9とデザートイーグルも隠し持っている。いわば歩く武器庫。

「んで、いま彼はどこにいるの」

「外務省にいたるところを一気に攻める。機動隊には黙認してもらっているから」

「というより逃走用の車をなし崩し的に提供してくれるって・・・」  
萩原家の信用は凄いものがあって、人を殺しても警察やら検察やらが全て隠蔽してくれるのだ。

「今回の任務はトラウマになりそうね」

「ああ」

少しげんなりしながら、俺たちの任務が始まった。

第七話 intruders (後書き)

よ……ようやく始まりました。すぐに終わりますから大丈夫……？

原作にあまり絡んでません。ごめんなさい。

この戦いが終わったらイ・ウーとの戦いになるかな？  
お楽しみに。

## 第八話（前書き）

更新が遅れました。すみませんです。

## 第八話

外務省、国際テロ対策協力部。そのオフィスに侵入した俺たちは、一生付きまとうトラウマ物の光景を目にした。

見渡す限り、血　。

首が引き裂かれ、心臓が抉り出されている若者たち。その奥に立つのは、漆黒のコートを身に纏い、剣を腰に提げている女だった。

「願・・・?」

俺の名を呼ばれる女。

「どうしたの?そんなところで立ちすくんで」

そう指摘されるまで、俺は自分がその光景に圧倒されていることに気付けなかった。

「・・・貴様・・・誰だ!」

俺は愛銃のXD-9をその女に向けた

「変わってないよね」

しかし、俺の指が引き金にかかる前に違和感を感じた。それは、絶対にありえない事だが、まるで

銃がバラバラに斬られているような。そんな感覚。

「　　っ!」

すぐに体勢を立て直し、ナイフを引き抜く。亜音速で切りかかってきた刀・・・日本刀をすんでのところで止めた。

「反応は速くなってるかな?でも・・・ほっそいねえ」

女は刀を捨て、俺の後ろに回り

「弱い子は、萩原には要らないんだよ。私だけでいい」

その言葉を残して、立ち去っていった。呆然と立ち尽くす俺。翠が俺の体を揺さぶっているようだ。

「願！アンタ、あのままでいいの?!」

「・・・追うぞ。いいな」

そうして俺たちは足早にそこを立ち去った。

『そうか。あいつと接触したか。どうだった?』

「やはり、まだ覚醒していません。あの術を教えるのはまだ時期尚早と」

『うむ。まあ、彼らの演技には感謝しなければな』

「はい。こちらのほうからしておきます」

『頼むぞ・・・棕香』

「頼まれました・・・おとーさん」

## 第八話（後書き）

短くてすみません。でも、ちゃんとコラボにはつなげました・・・。

## 第九話 萩原刀 その名は虎徹

外務省の建物から駆け出ると、そこは血の海だった。機動隊員が斬られ、駆けつけたSATが蹂躪シエノサイドされている。これはテロではない。破壊活動ではなく、虐殺だ。

「……翠。約束を破るぞ」

「……え？」

叔父さんの棺の元に誓った誓い。「武偵でいること」。

「……内閣府諜報科特殊情報官、萩原棕香。陸上自衛隊員として貴様を逮捕する」

「……面白いね。たかが特殊部隊の隊長が」

身内同士の戦い。はじめから結果は見えている。棕香は力を体現する、強く凛々しい姉だった。

だが。

見捨てるわけにはいかない。

見過ごすわけにはいかない。

俺は、自衛隊員だ。

棕香が刀を抜き、飛び掛ってくる。俺がそれに対して対抗する間を与えず

「願!!」

翠の声が聞こえ。

「願くん！」

柚梨佳の声が聞こえ。

「お前は強くなる、願。だが、そのまえに」

叔父さんの声。一番聞きたかった声。

「女の子には、優しくな？」

いや、そうじゃないだろう。と突っ込みを入れた。

棕香と切り結びながら。

「?!」

棕香が驚愕の表情を浮かべる。

「 H S S × H S S ・ ・ ・ S ・ H S S と言ったところかな」

棕香が刀を引く。その瞬間にあわせて、色金を滑らせると、狙い澄ましたかのように棕香が倒れる。

「この状態の俺には勝てない。わかったでしょう?」

「 もう、いいや。皆さん、カットです」

そういつた瞬間。

血の海に漬かっていた人たちが

「いやあ、凄いスタントですね」

「君、いい体してるね。S A T 入らない?」

笑いながら立ち上がった。周囲の人は大笑いしている。

「 ・ ・ ・ 棕香。アンタ死体使いにでもなったのか」

「最初から死んでないよ?というか、C I A のスパイって言うのも嘘」

「じゃあ何で俺達は襲撃された!」

その問いに、棕香は。

「あゝ。あれ、部屋間違えちゃったの。ごめん。テへ」

・ ・ ・ 萎えた。そして、ぶん殴りたくなってきた。

第九話 萩原刀 その名は虎徹（後書き）

・・・適当!!!

次からはきっちりやりますよ!!!

第十話 変貌した朝と出立。そしてネタはIS。(前書き)

新章、第二次朝鮮戦争!!

## 第十話 変貌した朝と出立。そしてネタはIS。

『我々、朝鮮民主主義人民共和国は、いわれなき嫌疑をかけて不当な制裁を発動している大韓民国および日本国に抗議し、宣戦を布告するものである！』』

いつも通りの朝のはずなのに、何かが違う。

『三山官房長官は記者団に対し、『これを日本国への正式な宣戦布告として捉え、自衛隊の出動を視野に入れた適切な対応を開始すると述べました』』

昨日と同じように朝食を取り、同じコーヒーを飲み、やっていない宿題に慌てて。そんな毎日が続くと思っていた昨日の夜。

『官房長官の発言に対しては野党側からは憲法違反との反発も出ています』』

『そもそもね、北朝鮮には日本を攻撃する能力はないんですよ。空自や海自が迎撃部隊を展開していますがね、あんなのは過剰反応なんです。しっかりと話し合いの道筋をつけてですね』』

そして、今朝。テレビをつけると世界が一大事になっていることがわかる。俺はその情報を無意識に整理し、まとめ、今後を予測していく。北が狙うとすればソウルと大田の在韓米軍基地だろう。しかしそんなのはすでに米軍も予測しているだろうから、米軍基地以下韓国の主要都市には米軍の対ミサイル連隊が、黄海には第七艦隊が布陣する。自衛隊はおそらく西部方面の全軍に出動命令が下る。それが治安か防衛かによって異なるが、少なくとも出動して重要防衛拠点<sup>三軍統合任務部隊</sup>に配置されることは間違いない。そして重要になるのは特殊作戦群とトライスター<sup>F</sup>。フォックス<sup>W</sup>・山猫<sup>D</sup>・デッドセルの三軍に分かれている特殊部隊と特殊作戦群が布陣すれば日本の防衛は確保される。そこまで予測して、後はやめた。所要時間、三秒。恐るべき速さで解決策を導き、それを躊躇なく実行してしまう。そんなことが原因で今の俺が置かれている状況 苛められるという状況

を作り出したのだから。

「萩原君。ちょっと来てくれ」

学校　その頃は中学生だった　にて。授業中にいきなり教頭に呼び出された俺を、周囲の奴は嘲笑うように見る。しかし俺には　いや、俺と同じクラスの翠も　教頭の顔色がおかしいことがわかった。おそらく、特殊部隊員への非常呼集。特に俺は司令官の身だ。迎えに来るのは横田副長率いるそのスジの奴らに相違ない。

「わかりました」

特に抵抗することもなく立ち上がり、教頭の近くに歩み寄る。教頭はうなずくと手招きした。

「応接室で、君の客が待っている」

「ええ、わかりました」

震える声でそう言う教頭に冷淡な声で返す。

「まさか、君が・・・」

「機密事項です。それ以上言うと殺されますよ」

そう斬り捨てて、俺は無言を通す。気が付くと応接室の目の前だった。応接室の扉の脇には拳銃を携帯したスーツ姿の屈強な男が二人たっている。

「・・・ご苦勞なことで」

「・・・そちらこそ」

合言葉。つか、即興はきついで。

「司令。お待ちしていました」

「すまん、授業中だったからな」

年上从上から目線で相手するにはまだ抵抗があるが、階級的にはしょうがないな。立ち上がって迎えてくれた横田の対面に座る。横

田の隣には俺の担任が顔を真っ白にして座っていた。大学を卒業したての先生には荷が重すぎるかな？そうアイコンタクトした俺に伝え、横田が先生に退出するように促した。先生はあつという間に転がり出て、残されたのは教頭一人。彼も出たそうに扉をちらちらと見るが、状況を知っている人間がいなければ困る。

「さて。ニュースは見ましたね？」

「朝鮮か。相変わらず高圧的な国で困るな」

「ごもつともですが、そうも言ってられません」

横田が書類を出してきた。

「司令にはすぐに隊務に復帰していただきます。毎日訓練はなさっておられるので所定の復帰訓練は必要ありません。しかしこんな状況ですので状況説明は受けていただきます」

「承知した。すぐに出発か？」

「はい。荷物はまとめてあります」

ち、ミスった。予想していれば机の上の工口本は片付けておいたのに。横田、ニヤニヤするな。

「・・・わかった。参考書は？」

「古い電話帳と間違えて捨ててしまいました」

うん、コンビネーションはバッチリ。IS?!というツッコミはそれこそ捨ててしまえ。あとは・・・

「り・・・伊椎一佐は？」

「名前で呼ぼうとしましたね?・・・招集はかかっています」

翠・・・すまん。また『Fユニツト』獣の集に戻ることにしようだ。

こうして、俺と翠は遠路(?)はるばる市ヶ谷駐屯地までやってきて、その足で羽田まで飛び、一日と立たずに国内で最前線の熊本県熊本市、健軍西部方面隊総監部まで足を運ぶことになったのである。

「ねえ・・・この移動って意味あったの?最初から健軍にへりを飛

ばせばすまなくない？」

「輸送機のほうが速いから（キリッ）」

翠のジト目に、どこからか吹く風に髪をなびかせて答える。な、なんだ？俺の体からキラキラした粒子が……。

「うわ、天性の『イケメンが愛を語る』モードだよ」

「畜生……男の敵め！！」

「客人……覚悟しておけよ！！」

「『西部方面普通科連隊はリア充をも駆逐する！！』」「『そんな……』」

第十話 変貌した朝と出立。そしてネタはIS。(後書き)

次回の願さんは・・・？

「なんでお前がここにいるんだ・・・？」

「うおっ！！あぶねえな！！」

「貴様・・・！！」

なんてことにはなりませんww

願

「だったら書くなああああ！！アタタタタタタア！！」

ラルド

「ひでぶっ！！って、私が死んだら終わりだよね？！」

願

「生き返りやがった・・・」

## 第十一話 初の海外出撃

まず、自衛隊の基礎知識を説明しておこう。

陸上自衛隊は全国を5つの管轄に区分している。北部（北海道周辺地域）、東北、東部（関東・中部地域）、中部（中部・近畿・中国・四国）、そして西部（九州・沖縄）。しかし特殊部隊はこの方面隊制度に捕らわれない有機的な活動を求められるため、中央即応集団と特殊作戦コマンドは日本全国を行動範囲としている。

海上自衛隊は横須賀の自衛艦隊司令部の指揮の下に全国を5つの地方総監部（大湊・舞鶴・横須賀・呉・佐世保）に区分し、さらに4つの護衛艦隊を全国に配置している。そして陸上・航空との統合任務のために設置されているのが『海兵旅団』である。

航空自衛隊は府中の航空総隊司令部を中心として3つの航空方面隊（北部・中部・西部）と南西航空混成団を全国に配置している。

そして航空総隊司令部とは別立ての組織として特殊防空師団ハイジャックや航空機を使用したNBCテロ、核ミサイルなどの撃墜を行う実戦組織が設置されている。

さて。今回発生した朝鮮での非常事態。日本大使館との通信が取れず現在は効率的かつ安全な邦人救助が難しい状況にある。いかに邦人を救助しつつ北朝鮮軍を叩き潰すか。NATOや米軍が介入してきていない今が作戦実行に最適のタイミングであることは上層部にもわかつているはずなのだが……。

熊本県熊本市、陸上自衛隊健軍駐屯地。三軍統合任務部隊所属の

トライスター

我々『Fユニット』は現在そこで足止めを食らっていた。先ほどからUH-60JAやCH-47JAが次々と離陸していくが何があったのだろうか。

「佐世保の地方総監部が攻撃されでもしたか？」

「だったら私たちも出動するはずよ。こんな内陸に寝かせておかれるより率先して火事場に放り込まれると思うけど」

01式指揮通信車の屋上。寝転がって何の気なしに呟いた憶測は屋上の端で足をぶらつかせている翠の言葉によって打ち消された。

まあ、翠の言うことは的を射ている。

「だったら何だ・・・？輸送ヘリしか飛んでいないが・・・」

「邦人の救助のために海自のヘリ空母が動いたか、ついに特殊作戦群が動くか。このどちらかね」

実際にはこの2つ以外にも候補はあるが、それを言い出すときりがなくなる。

「・・・可能性としては邦人救助だな。しかし、救助だったら俺たちも・・・」

「火の粉を払う役目も必要だしね・・・」

徒然と考えていると彼方の隊舎のほうから隊員が走りこんできた。手には書類の束が握られている。

「し、司令！！出動命令です・・・！！」

息を荒くする隊員の手から書類をもぎとり、一枚目を読んで絶句する。

『韓国駐留のアメリカ軍基地の再制圧を開始せよ』

「 総員に達する。空挺作戦用意。30分後に出撃する！！」  
「りよ、了解！！総員、空挺作戦用意！！」  
『トライスター各員に通達。空挺作戦を開始する。用意を開始せよ。30分後に出撃する』  
一枚の書類で、2000人からなる日本最強の特殊部隊が動く。  
命令の怖さを実感した瞬間だった。

大韓民国忠清南道、大田<sup>テジョン</sup>。在韓米軍基地が存在するその都市は在韓米軍のオペレーションで特に重要視され、最新鋭の戦闘機が多数配置されていた。しかし開戦直後、北朝鮮によって速やかに地上から抹殺されてしまったのは大田である。都市圏は壊滅状態だったが米軍基地は破壊を免れた。しかしそこそが北の思惑だったのである。米軍機がスクランブルすると同時に周辺に潜伏していた500名<sup>第8特殊軍団</sup>からなる朝鮮人民軍特殊部隊が基地に突入、基地をいともたやすく制圧してしまった。米軍最新鋭のスクランブル機はあっという間に叩き落されてしまったが、韓国軍は首都ソウルの防衛に重点を置きすぎて大田に戦力が回っていない状況であった。

いかに制圧されていたとしても、大田の米軍基地は避難用空港としてはまだ十分に使える設備がある。ここを制圧すれば在韓人の救

助体制が築けるに違いない　　そういった意見から発されたこの命令は完全に韓国政府には無断で発令されたものであったのだろう。なにしろこの作戦を認可する韓国政府自体が今は韓国にないのだから。

「総員出撃準備完了。離陸します」

「よし。　　隊司令より総員に達する。今次出撃の目的は韓国忠清南道にある大田米軍基地の奪還にある。当該目標を守備しているのは第8特殊軍団500名。何名であるにしろ我々『Fユニット』の敵ではない。しかしこれが初の実戦だ……。気合入れて行け！以上だ！！」

(機長より。これより大韓民国領空に侵入します。本部からは)

「何も無い。オール・ゴーだ」

(了解)

技術研究本部が開発したC-2輸送機は韓国領土に侵犯するに当たって高度をギリギリまで下げていた。海面との目測で250から300メートルほどだろうか。防空レーダーには気づかれているに違いないが今はそれどころではないだろう。北朝鮮は侵攻する第一段階として韓国軍のネットワークをウィルス兵器でズタズタに引き裂いてしまったからだ。物理的に回線を遮断したにしろウィルスにのつとられたにしろ、復旧には徹夜で三日はかかるに違いない。さらに物理的な攻撃がかかれば、それはさらに長期化する。もしかするとレーダーが起動していないかもしれない。

『目標まで6000secondを切りました。降下準備を開始してください』

「降下準備！！小隊別に整列！！」

空挺装備を着用している場合、通常空挺隊員の場合は装備を身

につけている状態で立っているのは大変である。しかし『Fユニット』はそんなヤワな鍛え方をしていない。空挺装備を身につけていてもお婆ちゃんを10人背負っていても直立。それが特殊部隊員である。それは女性陸上自衛官ウエイブであるうと関係ない。

「整列完了!!」

(降下タイミングまで、90)

「カーゴ開け!!」

「了解!!」

降下指揮官が開放レバーを倒すと・・・ドン、という音とともに空気が一気に薄くなる。

(30を切った)

「降下まで30!!」

「降下まで30だ!!」

「ごうごう鳴る風で、耳元で叫んでもようやく聞こえるほどにかき消されてしまう。」

(10、9、8、7、6、5、4、3)

「降下用意・・・」

(2、1・・・0!!)

「降下!!」

俺が無線機に叫んだ瞬間、部隊全員が韓国の空を舞った。

## 第十二話 降下、殲滅、新たな攻撃と出動命令

「・・・攻撃、開始!!」

風が耳元でごうごうと音を立てていて、返事が全く聞こえない。

しかしその代わりになったのは少し先にいる対戦車攻撃部隊が一斉に01式軽対戦車誘導弾を発射した光だ。この軽MATは無反動に近い<sup>軽MAT</sup>ため、続いて降下する俺たちには何の影響もない。しかしてその攻撃力は絶大。滑走路に駐機していたSu-24爆撃機やSu-27戦闘機がその装甲を引き裂かれて滑走路に火柱を立てる。そしてその火柱のおかげで降下ポイントの状況が逐一把握できた。俺が率いる第一部隊はヘリポートから、翠の第二部隊は司令部庁舎から侵入して敵を殲滅。横田率いる第三部隊は滑走路等管制施設の制圧他の第四、八の部隊は周辺警戒と敵車両の破壊。

「着地!! 作戦開始!!」

(Roger!!)

一斉射で全滅しないように距離を開けて突入を図る。ろくに武装を帯びていない飛行士や管制官は着地と同時に蜂の巣になっているため、敵となるのは基地警備隊とここに駐留している攻撃部隊か。

(爆薬、設置完了!!)

「実施!!」

突入用のチューブ爆薬でドアを切断して一気に突入する部隊員。

最終突入地点から突入後、十秒以内に相手を殲滅、次なる突入ルート<sup>F E P</sup>の開拓に努めよ。警視庁特殊部隊より厳しい条件なのは実戦環境下であることともう一つ。それは。

(トラップ確認!! ガスだ!!)

「ガスマスク着用」

トラップの速やかな発見、解除または回避。それが求められるからである。

(・・・催涙系ガスです)



「?・(こちらは大田米軍基地だ。釜山海軍基地、応答してくれ)」

「(こちらは釜山海軍基地だ。大田基地は制圧されたのではなかったのか?)」

「(大田基地は陸上自衛隊が再制圧した)」

「(自衛隊・・・?)」

「(そうだ)」

「(再制圧に感謝する。しかしその旨に関して政府からまだ説明を受けていないのだが?)」

「これは日本政府の独断による作戦だ。韓国政府への釈明が遅れたのは謝罪する。その代わり、日本政府は韓国軍に対してあらゆる支援をするつもりでいる」

「(わかった。君たちの事は直ちに政府へ通達しよう)」

「(感謝する)」

韓国語で行われた通信は、ここで切れた。

「さて。韓国軍には事実が伝わった。韓国軍が攻撃してきたら最低限の防衛をしつつ撤退。北が再び攻撃してきたら速やかに対処行動を取れ。あらゆる対処行動は現時点をもって全て認める」

「了解!!」

野太い声が司令室に響き渡り、筋骨隆々の男たちは部屋を退出していった。残ったのは幹部が横田副長と翠の二人だけ。あとは通信士数名と空自から出向してきたリーダー監視員二名のみだ。

「さて。北は攻撃してくると思うか?」

「来るでしょうね。ここが再び制圧されたというのはすぐにわかることでしょうし」

「私も横田さんの意見に賛成ね。通信回路に複数のチップが仕込まれていたわ。解析したら設置してあったトラップとリンクしていたことがわかったし、恐らくすでにミサイルが発射されているわね」  
翠の物騒な予測。しかしそれはすぐに当たることとなる。

「北朝鮮領、江界付近に微弱な固有電波を確認!!」

「解析!!」

「解析完了!! テポドン一号、総数18です!!」

「韓国海軍イージス艦『世宗大王』のイージスシステムがミサイルらしき影をキャッチ!! 大田米軍基地に直撃するコースです!!」

「上昇高度より推測、通常弾頭!!」

通常弾頭ならばどこで撃墜しようが被害は少ない。

「よし、高射群は迎撃開始。空自・・・いや、海自に連絡だ。イージス艦『こんごう』で迎撃させる!!」

「了解!!」

「滑走路よりC-2輸送機を」

「直撃してしまえば一緒だ」

マニュアルどおりに動こうとする空自要員をたしなめる。

「しかし・・・!!」

「ここは韓国軍を信じる向きを見せておけ」

「・・・了解です」

宇都宮駐屯地、中央即応集団特殊作戦群本部。日本版デルタフォースと呼ばれる彼らに出動命令が下ったのには複数の理由がある。ひとつには実戦データの採取。もうひとつは特殊部隊の連続投入で北朝鮮を追い詰めること。まあそんな理由が隊員たちに伝わる道理

はない。

「0157時、陸上幕僚監部より出動命令が降りた。我々は直ちに西部方面普通科連隊と合流し、朝鮮半島に出動する！！」

「了解！！！！！！」

第一中隊第三小隊所属、鷹山勇治二等陸尉。彼にとっては初の実戦となる。

そしてこの出動命令が、韓国にまだ滞在している数万からなる邦人の救助の一助となったのである。

**第十二話 降下、殲滅、新たな攻撃と出動命令（後書き）**

はい、来ました来ましたよ夕方。

白石さん作、「防人の45口径」の主人公さんに出演していただき  
ました！！

## 第十三話 出動する特戦群

「テポドン、撃墜完了!!」

「第七艦隊と思われる艦隊が報復攻撃を開始!!」

大田基地のデジタル司令室。全面スクリーンの壁には複数のウィンドウが立ち上がっている。あるひとつには朝鮮半島周辺の友軍位置情報、またあるひとつはリーダーリンク。パネルコンソールには各地域の交戦情報がリアルタイムで表示されている。

「西部方面隊への通達は？」

「やっております」

自衛隊がこの『戦争』もはやこう呼んで差し支えはあるま

いに参戦すれば一気に勝機は見えてくる。特殊作戦群300名の投入だけでも、ソウル地区には大きな援護になるだろう。

「物思いにふけて・・・何を考えてるの？」

「特殊作戦群、どこに配置されると思う」

横に歩いてきた翠に問いかける。

「・・・米軍が仁川に上陸するんだったよね」

「ああ。NATOを引き連れてな」

「その後に秘密裏に、つてところかしら」

翠が出した予測は、俺の予測とほぼ一致していた。

「結果はどうなる」

「成功するわね」

「・・・いや、失敗するだろう」

「なんで？」

そこが俺の予測と異なる部分。あくまで北朝鮮を相手にするなら完全な勝利を収められる。しかし。

「中国だ」

「あ・・・」

北朝鮮と軒を接する中国。もし、彼らが同盟を結んでいたら。

「最悪の場合、海陸から挟み撃ちっていう状態もある」  
「・・・せめて・・・航空部隊さえあつたら・・・」  
翠の嘆きは幸い、俺にしか聞こえなかった。

緊急事態のため封鎖されていた羽田空港まで第一ヘリコプター団のCH-47JAで飛び、そこから防衛省が用意したボーイングB747 400特別輸送機に乗り込む。総数300名の特殊作戦群なら2機で十分に輸送できるらしい。

「大門隊長、本当に朝鮮に？」

「本部からの命令ではそうだった。中央中即連即連隊も九州で合流するらしい」

「中即連も・・・」

陸上総隊とは別立ての指揮系統を持つ特殊作戦群。その司令部たる中央即応集団は本拠をキャンプ座間においているため、在日米軍へ情報が漏れる恐れがあるらしい。そのため今回は特殊作戦群が主体となって作戦を行うという変則的な手段をとった。とは司令官の言である。

その中央即応集団が擁する連隊規模の戦力として中央即連隊が召集されたということは・・・。

「戦争の準備って言うわけですか？西部方面WAIR普通科連隊も出動命令を受けたって・・・」

「それだけじゃない。第一空挺団と空挺教育隊が出動準備だそうだ。富士教導団もだったか？」

大柄の体を窮屈そうによじらせて、隊長が後ろを向く。クリップボードに見入っていた沖田副長が応じるようにすっと目を上げた。

「空自の同期が言っていましたけど、スクランブル機の常時待機数が2機から12機になったって……」

「全軍が殺気だつてやがる……」  
そう呟いたのは射撃手の異曹長だ。

「というより、鷹山。あまり上層部に首を突っ込まないほうがいいぞ」

「え？どうしてですか？」

沖田副長の冷静な言に呆気に取られてしまう。

「こんなご時世だ、俺たち以外の特殊部隊が創設されても不思議じゃない。そもそも俺たち以外に特殊部隊が三つあるって言う話もある」

「三つ……？そんな、日本がそんなに運用する意味が」

「米軍で取り沙汰されてる統合任務。米軍内で指揮系統が整う前に日本が特殊部隊をテストケースにすれば貸しが作れるだろう？」

「しかも対テロの抑止力にもなるからな」

大門隊長が野太い声を挟んでくる。

「俺たち中即団からも姿を隠せるほどの凄腕部隊だ。俺たちが監視されていても不思議じゃない。しかも俺たちが向かうのは戦場だ」  
場合によつては戦死もありうる。たとえそれが味方の銃弾だとしても　いや、パンドラの箱を開けた人間は最早同胞ではないのかも知れない。

「まだ未来がある身なんだ。大事にしるよ」

「……はい」

「お前のことだ、いい女でも何でも抱けるだろうよ」

大門隊長の考え無しの一言で輸送機が不自然に揺れたのは余談である。

「準備は整ったか？」

「はい。全て」

「そうか・・・では、放つとしようか」

「ええ」

『祖国大戦争で無念に散ったものへ手向ける鎮魂<sup>勝利</sup>歌を』

## 第十四話 多数の罵倒

『自衛隊、朝鮮紛争に介入か？』

『海上自衛隊、対馬近海に展開』

『日本海にイージス艦集中配備』

『政府、国土安全保障法を国会に提出』

ネット配信のニュース、新聞の見出しは揃いも揃って日本の無法を喧伝し。

『事実上戦争状態にある朝鮮半島ですが、今後の状況はどのようなものになると思われますか？』

『まず忘れてはいけないのは、日本はいかなる戦争行為においても憲法で禁止されているということですよ。政府見解はここ数日でありと変わりましたがそんなことはあつてはならないことですし、そもそもアメリカを持って平和国家と言わしめた日本がこのような事態に自衛隊をすぐに出動させるのは』

TVでは政府の、自衛隊の無策をあげつらう。

『自衛隊なんてすぐにやられるだろ。ライトが何言ってるか知らないけどさ、持つてるのって米軍のお下がりだけだし？』

『戦争反対。我々が築き上げてきた財産が、幸福が壊されようとしています。日本の反戦精神を守るため、私たちは断固戦います』

『防衛省前で行われた史上最大級のデモに対し、政府は超法規的措置として陸上自衛隊部隊に治安出動を命じました。史上初の治安出動に対し、経済界からは強い反対の声も上がっています』

掲示板で、街頭で、マスコミで。ありとあらゆるところで繰り広げられる、反戦を旨とする戦い。彼らはいずれ武偵をも貶し貶めるのだろう。彼らは筋金入りの反戦主義団体である。

「まあ、俺たちの存在がばれていないだけマシか」

「そつね……。でも、消耗するわ」

「消耗するのも仕事さ。こんな国に産まれ着いちまったんだし、運

命として受け入れにやならん」

韓国に自衛隊が駐屯した、なーんてことがばれてみる。自衛隊は即日解体だ。二十万もの失職者が出て、ますます大混乱することは目に見えている。

「司令。防衛省のほうから撤退の指示が」

「・・・日本に帰って来い、つてか」

「いえ。ソウルに進出して特殊作戦群と合流せよ、だそうです」

「仕事が出来たってわけか」

「そうなりますね」

自他共にクールと認める男・横田も嬉しそうにしている。こんな緊迫した状況下、動いていたほうがじっくり考えずに済むからな。

「さて、じゃあ仕事やりましようか」

「そうだな。とりあえず・・・ここを引き払うことからだな」

そして、それから三十分と立たないうちに大田基地からは鼠一匹たりともいなくなったのである・・・。

「九州に着いたぞ」

「わーいわーい」

「気の抜けた合いの手はやめる鷹山」

到着早々沖田副長に注意された、そんな不真面目特殊部隊員鷹山勇治がお送りする『特殊作戦群の日常』略して『特戦群の日常』のお時間です。今日は国民の反対の声を背に九州は熊本県の健軍駐屯地にやってまいりました。

「何の番組か!!」

「そげぶっ!!」

大門隊長の正拳と俺の唇がファーストキスを・・・げふんげふん。全く・・・お調子者しかいないのはなぜだ?!」



は聞かないでください。

「・・・国民！！君たちの意思、しかと受け取った！！」

はるか彼方、有刺鉄線の向こう側に広がる熊本市に向けて敬礼する俺たち自衛隊員だった。

出勤の際に国旗を持って歓声を上げて送り出してくれた国民は優しいに違いない。敵なんて恐るに足りないさ！！

第十四話 多数の罵倒（後書き）

次回は少し突拍子もないことになりそうです・・・。

## 政府機能壊滅（前書き）

結構やっつけで書いていました・・・。

## 政府機能壊滅

大韓民国首都、ソウル。開戦直後に朝鮮人民陸軍がなだれ込んだ  
そこでは、開戦から三日経った今も戦闘が続いている。

「自衛隊はまだ来ないのか?!」

「日本政府からの回答はありません。米軍は第七艦隊と海兵隊の出  
動を決定したとのことです」

韓国併合から数十年経った今でも韓国人の中には日本への反感を  
持つものはまだ多い。そのような状況を鑑みてなのか、日本政府の  
対応はすこぶる遅いものであった。釜山海軍基地から入った連絡を  
鵜呑みにするなら、陸上自衛隊はすでに行動を開始しているという。  
しかし……。韓国軍総司令官はそこで少し躊躇った。これは韓国  
と北朝鮮との戦いだ。日本も宣戦布告を受けた国である以上友好を  
保たなければならぬが、日本は古今稀に見る平和主義国家だ。

「司令官。日本国籍の輸送機が着陸を求めています」

「日本国籍? どういうことだ」

「わかりません。国際空港に確認したところ自衛隊機の可能性があ  
るという答えがありました」

「自衛隊・・・?」

防衛出動を命令されていない以上、自衛隊がここまで来れるはず  
はない。邦人救助か、それとも秘密作戦か。

「どういうことだ・・・?」

『筈村さん、この国民保護法というのは一体どういったものなので  
しょうか?』

『はい、この国民保護法というのは字義通り『国民の生命や財産を

保護するために運用される法律』です。今回のような『武力攻撃事態』、つまり日本が攻撃を受ける可能性が高いという事態ですね、の場合、総理大臣が安全保障会議を招集して『対処基本方針』を作ります。この『対処基本方針』というのは自衛隊や警察がこの事態に対してどういう対処をするのか、またはもし攻撃された場合にどのように対処するのかについてまとめたものです。その方針は閣議で決定された後、通常でしたら国会で承認を受けて発動という形になります。しかし今回のような場合、政府は事後承認で発動することが出来るんです』

テレビで小難しく説明するこの軍事評論家の言葉を、一体どれくらいの方がちゃんと聞いているのか。自衛隊員を親に持つ私ですら半分も理解できない。『戦争が始まる』。その一言を残して三日前に駐屯地に行ってしまった父さんは無事に帰ってこれるだろうか。なんでもっと話し合わないの。何ですぐに力でねじ伏せようとするの。

『そしてこの方針に従って・・・この国民保護法が発動するわけですね。でも笈村さん、この法律は確か最高裁の違憲審査の対象にされるということでしたが・・・』

『確かにそのとおりなんです。しかし現在は法律としてしっかりと機能していますので大丈夫です。しかもこの事態が終了しない限りこの法律は違憲審査しないというコメントが最高裁判所長官からありましたから』

『でもね笈村さん、あなたが先ほどおっしゃった『武力攻撃事態』って、実質は韓国と北朝鮮の問題ですよね？だったら日本が対処しなくても』

『韓国に何万、何十万の日本人がいると思ってるんですか？九州と韓国は目と鼻の先ですし、北朝鮮がミサイルを発射すれば十五分かそこらで日本に直撃してしまうんです。関係ないなんていうのはあり得ません』

『それですよ。あなたが無責任に恐怖を煽るようなことを言うから

国民は動揺するんでしょう？北朝鮮が両面作戦を取れるはずがないでしょうが」

『あなたこそ無責任に安全だ安全だといっているようなものでしょう。実際に』

もう嫌だ。お父さんが無事であればいい。そう思いながら私はテレビを消した。戦争なんて、どうせ起きはしないんだから。無理矢理自分を納得させ、私は家を出て、学校に行く。家の敷居をまたいだとき、ふと嫌な予感がして振り返った。思ったとおり何も無い。何も変化はない。よかった、と胸を撫で下ろし、私は再び道を歩き始めた。振り返ったときに目に焼きついた『前瑞』の字を瞼の裏に浮かばせながら。

「今回我々はソウル近郊の都市である仁川から米軍とともに上陸、付近に展開している敵を叩きのめすことになった」

対馬沖を航行中の輸送艦にて。俺たち陸上自衛隊特殊作戦群は上陸作戦の詳細を司令官から説明されていた。

「支援は第七艦隊と第一空挺団が行う。上陸部隊各員は常に上空を警戒しろ」

司令官の言葉が耳に届くか届かないか、そんな刹那の時間に、それは起こった。

『戦闘部署発動！！対空戦闘用意！！北朝鮮空軍機が接近中！！』

「領空侵犯だぞ、空自はなにやってる！！」

「沖繩と本土に戦力を割いてるんだ、こんなところにまでF-15<sup>イーグ</sup>が来るわけがないだろ！！」

『シースパロー、発射！！・・・一機撃墜！！』

輸送艦隊に降りかかった災難。それはその後の災難の序章だった。  
。。。

「・・・内閣総理大臣、梶原です」

日本の行政のトップに立つ内閣総理大臣に直通電話が入ったのはついさっきのことである。彼の前には陸海空の幕僚長と防衛大臣、そして防衛大臣直轄の情報部の長が揃い、総理の青ざめた顔を冷然と見つめている。

『大和総帥の萩原だ。総理、君は防衛出動を命じることは無いと国会で表明したそうだね』

そして電話の向こうには、自衛隊の各部に見えない網を張り巡らせている治安維持組織の総帥。その声は実にフラットだ。

「・・・はい。憲法に照らしましても、第二次朝鮮戦争への対策を取ることは許されないと・・・」

『しかし、現に日本の目と鼻の先で戦争が始まっている。湾岸戦争を思い出してみたまえ』

先進国で唯一湾岸戦争に軍事力を派遣しなかった日本は世界中から強い批判を浴びた。『先進国が世界の平和を維持するために力を振るうことは義務である』とは国連安保理の総意であった。その反省を込めてPKO協力法が出来たのである。

『さらに挙げるなら9・11後のイギリスの対応だ』

君主制の国家は、軍隊の統帥権を君主にゆだねている。実際は国防省が管理掌握する統帥権だが、かのテロが発生した一時間後にはイギリス軍は地中海から大西洋、北海にまで戦力を展開した。その命令は全てイギリスのトップである女王から発せられたものであり、トップの絶対が改めて証明された一件であったとされている。

「し、しかし、わが国には9条が・・・」

『憲法など見解を変えれば済む話。君たちの政治生命より日本の安全が優先される。日本が占領されてしまったら政治生命もクソもあるまい』

「ですが、そんな事例は今まで  
『無いからこそ徹底的にやるんだ。どのような穴があるかわからな  
いからこそ、な』

あくまで話し合い。それが現政権の主義であった。しかし今は有  
事。話し合いを行える状況ではない。

『・・・決断できないのなら、私が命令しよう。梶原仁内閣総理大  
臣。君は直ちに自衛隊を防衛出動させ、西部の防衛を蔽とすること。  
また、命令の撤回はいかなる状況においても認めない。・・・忘れ  
るなよ、君の代わりはいくらでもいるのだ』

「できません！！自衛隊を出すことなど！！」

『安心したまえ、君が命令を出さなくても世間は君が命令を出した  
と考える』

どこかのマスコミが真相をかぎつける可能性はあるが、そうなっ  
たら情報部を使って潰す。

「・・・」

『防衛大臣。聞こえているね？』

「は」

『直ちに出勤させてくれ。しっかりな』

「了解しました」

防衛大臣以下、防衛省関係の人間はそれを期に足早に立ち去って  
いく。残ったのは総理と電話から漏れ聞こえる声のみ。

『梶原君。君の手腕は評価されない。それを覚えておけ』

電話が唐突に切れ、そして次の瞬間扉が蹴破られた。迷彩服を着  
た複数の男が侵入してきたのを視認する間もなく、梶原総理大臣は  
体のいたるところを撃ち抜かれて即死してしまったのだった。

『え、警察庁が発表した情報によりますと本日午後三時頃、首相  
官邸内に複数の暴力団関係者が侵入し、梶原総理大臣以下政府の主

要メンバーが射殺されたとのこと。警察が押収した武器はいずれも共産圏で使用されていたもので、北朝鮮のバックアップを受けた可能性も視野に入れておられます。」

『内閣で暗殺されたメンバーは以下のとおりです。総理大臣、官房長官、国土交通大臣、経済産業大臣、厚生労働大臣、環境大臣、財務大臣、外務大臣が即死。文部科学大臣、国家公安委員長、総務大臣は現在病院に搬送されています。なお、防衛大臣と法務大臣は無事に保護されました』

『防衛大臣が先ほど会見を開き、自衛隊の全戦力に対して防衛出動を命令したと発表しました。内閣の存続が突如危ぶまれる事態となったことが決断のきっかけになったと専門家は指摘しています』

『大和』直属の戦闘部隊はよくやってくれたようですね』

『これで国民も目を覚ますじやろうて』

『いや、まだ甘いでしょうな』

『実際に国民が危険にさらされたわけではありませんから。今回の任務はあくまで防衛出動への『障害の排除』です』

とある屋敷の中。楕円型の机についている七人の老若男女。そして一つの大型モニターにはまだ若い男の顔が映し出されている。

『とはいえ、これ以上危機を誘発させるわけにも行きません。最悪の場合世論は後回しに　　なんだ、通信中で・・・沖縄？』

『どうなさいました、総帥』

『・・・中国か・・・！！海保に手出しをさせるな。海自をすぐになに？！海保が拿捕に動いた？！』

珍しく動揺する男。

『すぐに引き返らせる！！いいな！！』

新たな危機。それが始まった瞬間だった。

政府機能壊滅（後書き）

・・・やっちまったえ・・・。

次回、タカが89式小銃で頑張っちゃいます!!

あと、ソウルがついに・・・。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6857v/>

---

緋弾のエリア ~ 暗黒の刃 ~

2011年11月10日03時15分発行